

対談

# 日本近現代史の 地政学的環境と苦難

安全保障が危機にさらされているにもかかわらず、現在の日本は  
ポスト・モダンの気分に覆われ、危機と苦難を自覚していない。



渡辺利夫 拓殖大学学長

遠藤浩一 拓殖大学日本文化研究所所長



## 朝鮮半島は日本の安全保障の重要点

遠藤 平成に御代がわりして二十二年、政権交代して一年半、そして戦後六十六年になりますが、日本の地政学的環境はまったくと言っていいほど変わっていません。いや、むしろより深刻になっています。かつては大陸から共産主義の圧力を受けていましたが、今は軍事力を背景とした剥き出しの資本原理主義が押し寄せて来ています。極東の、

あるいは西太平洋の果ての苛酷な環境にあって、日本人は自閉し、なんだかちっぽけなことにこだわって、大戦略を構想するにいたらず、ウロウロしているような印象が否めません。

さて、前回のシンポジウムでは、近代日本と拓殖大学百年の苦難のそして健気な歩みについて検討いたしました。今回はそれを敷衍して、今日の日本の苦難の根源が奈辺にあるのか、考えてみたいと思います。

渡辺 一つに絞って考えてみましょう。一つといってもこ

れが最重要のものだと思つては、やはり焦点は朝鮮半島です。朝鮮半島はユーラシア大陸から日本の脇腹に向けて突き付けられた一本の鉞です。地図を見るとそのように見えます。

清国であれロシアであれモンゴルであれ、これら大陸国家が日本に勢力を伸張してくる場合、朝鮮半島を経由せざるを得ない。ですから日本にとっては朝鮮半島が敵対勢力の支配下に置かれるか否かが、安全保障の決定的なテーマです。

遠藤 今日も、全く同じことが言えます。

渡辺 そうです。振り返つてみれば日清戦争という近代初の日本の本格的な対外戦争は朝鮮を巡つて起こつた。当時の朝鮮は清国といわば「清韓宗属關係」にあつたわけです。軍事的保護の下にも置かれていた。特に李朝末期になりますと政争と内乱が夥しく、しかもあの国の政争、内乱は原理主義的なイデオロギーを持った人間同士の党争で誠に凄まじいものでした。争いが昂じると両派が必ず清国に派兵を要請するという状態だったので。その状況を明治の指導者達は見ていて、やはり朝鮮を清国から切断しなければ日本の安全は保障できないと考えた。そして清国に戦いを挑んで勝つのですけれども、その戦争の目的は講和条約第一條にあります。「清國ハ朝鮮國ノ完全無欠ナル獨立自主ノ

國タルコトヲ確認ス」というもので、日清戦争の目的は完遂できた。

それでうまくいくかと思つたら厄介なことが次々と朝鮮半島で起こる。朝鮮半島の儒学の中では事大思想が抜き難いものでした。日清戦争に勝利して日本が台湾、澎湖諸島、それから旅順、大連のある遼東半島を領有するのですが、三国干渉によつて遼東半島の清国への還付を余儀なくされる。これを朝鮮は見ていて、日本恃むに足らず、ならばロシアの保護下に入った方が朝鮮の独立は守られるだろうと考えるわけです。

当時ロシアは南下政策を進めておりましたので、待つてましたとばかりに朝鮮に手を伸ばしてくる。日露戦争には様々な来歴がありますけども、その元になつた要因を捲つていくと、朝鮮のロシアに対する事大に行き着くと私は考えています。

朝鮮問題は決して古い話ではありません。一九五〇年には朝鮮戦争を経験しています。中ソの支援を受けた北朝鮮軍が怒濤の勢いで攻め込んできて、釜山の郊外まで迫つた。もし朝鮮半島全土が共産化されてしまえば、日本が東西対立のフロントラインに立つて塗炭の苦しみを舐めさせられるに違いない。幸いなことにその状況を見た国連軍という名の米軍が仁川上陸作戦で北朝鮮軍を分断させて、押し戻

し、辛くも韓国の存在が担保されたのです。

そう考えると、朝鮮問題は近現代史の日本を一貫する安全保障の最重要ポイントだと言わざるをえない。だからこそ昨年三月に韓国海軍の天安艦が北朝鮮海軍の魚雷で撃沈させられ、四十数名の兵士が亡くなった事件は大変な事だと思つたのです。

しかし日本の指導部にそういう認識はない。もっと大きいのは十一月に起こつた延坪島への砲撃。朝鮮戦争後初の本土攻撃です。

いま、北朝鮮は正恩への権力継承を急いで、継承された権力基盤を固めようと必死です。そのために最もやらなければならぬことは第二回目の核実験です。北朝鮮は核弾頭の軽量化と小型化を目指しています。日本はもとより、アラスカやアメリカ西海岸にまで届くミサイルを持つとうとしている。第三回目の実験で核弾頭の軽量化、小型化は完成するはず。そうなつたら瀬戸際政策のハードルは一挙に高まることは確実です。日本、もしくは在日米軍基地が標的になる可能性がある。核ミサイル保有を宣言されたらアメリカとして容易に動けませんからハードルはぐんと高くなる。

多少なりとも近現代史の因果的な経緯を学んでいれば、天安の撃沈事件があり、延坪島がやられた時には「いざ」

という心構えが必要ですけど、そんな気配はまるでない。残念なことだと思えますけれども、情報が官邸に上がるまでに数時間かかったという話です。

あと一言だけ付け加えておきますと、私は集団的自衛権行使容認の千載一遇がここにあると思つたのです。北朝鮮に強いシグナルを送り、もちろん中国にも送り、それから普天間基地移設問題のあの愚策によって失われたアメリカの日本に対する信頼を取り戻すためにも、日本に残されている唯一の大きなカードは集団的自衛権行使容認です。今を逃していつできるのかという感じを私は持っています。

## 関数として出てくるアメリカ・イギリス

遠藤 そのとおりですね。ご指摘の通り、日本の地政学的環境においては、朝鮮半島をいかに日本の安定に寄与させるかが課題であり続けています。自主独立の安定した国家であつてほしいということが一貫した通奏低音のようなテーマなのです。

昭和二十五年（一九五〇）一月に米国のアチソン國務長官が口走つた、いわゆる「アチソン・ライン」によって、対馬海峡に線が引かれて、朝鮮半島をアメリカの防衛対象としないというメッセージを送つてしまう。それまでは金日成



がしきりに南進をしたがっていたのに対して、スターリンはむしろそれを止める立場にあった。スターリンは米国との全面対決を恐れていたわけですね。

ところがアチソン・ラインの表明直後、スターリンの心境はがらりと変化して、その年の三月に「どうもアメリカは朝鮮半島を自分の安全保障の範疇から除外したみたいだ。ついでには君が前から提起している問題について相談しようじゃないか」と、金日成をモスクワに呼んで一ヶ月間協議を重ねて南進にゴーサインを出す。

それから三ヶ月後に朝鮮戦争が勃発するわけです。長らく「あれは韓国が北進したのだ、韓国から仕掛けてきたのだ」という話がまことしやかに言われていたのですが、ヨーロッパにおける冷戦の終結のお陰でソ連の色々な機密文書が明らかになって、スターリンと当時の駐北朝鮮大使との公電のやり取りが全部明るみに出た。

これはやはり、善きにつけ悪しきにつけ、アメリカが関数として出てくるということなのです。アジアへのアメリカの関与は極めて大きな意味を持っている。しかしアメリカの判断が必ずしも正しかったわけではない。むしろ東アジア情勢の判断については間違っていることの方が多い。

そうはいつても、アメリカといかにして組んで、この地域の安定を確保するかは日本にとって大きな課題であるこ

とに変わりはない。

ここでもう一度話を百十年程前に戻したいと思うのですが、けれども、やはり日本の近現代史にとって東アジアで鈍のよう突き出た朝鮮半島をいかに安定させるか、その背後にいる中国、ロシアとどう対峙するかという問題と同時に、アングロサクソンとどう付き合うのか、あるいはこれを利用するのが、ずっと大きなテーマであり続けました。そこにこそ日本のサバイバルの鍵があります。

渡辺 当時のイギリスは世界最大の海洋覇権国家で七つの海を支配し、日の沈むことのない帝国を築いていた。そのイギリスと同盟を結ぶことによってロシアの南下政策を止めることができた。戦後はアメリカとの日米同盟によって共産主義の日本への侵入を阻止できたという歴史的事実があります。

心情的にアメリカ、イギリスが好きだ嫌いだという話ではなく、あくまでパワー・ポリティクス論にその根拠を置かなければなりません。どうも日本の論壇人はアメリカプードル論、ポチ公論などを平気でやっています。「それで何か建設的な答えでもあるの?」と訊いてみるとまるでない。世界最強の覇権国家と手を結ぶことが日本の安全に最も効果的に作用するはずだという簡単な事実が、嫌米感情によって見えなくなっているのでしょうかね。

日英同盟を結ぶに際して桂太郎、小村寿太郎たちは対露恐怖症の元勳伊藤博文たちと凄まじい罅迫り合いを演じた。国を守るために全精力を傾けて外交論争をしたのです。当時は論争の軸が外交と安全保障にあった。現代もそうあってしかるべきだと思つたのです。

開国維新から日清日露戦争までの日本の置かれた地政学的状況、これは誠に緊迫に満ち満ちたものでした。現在それが再現しているというのが私の見方です。

再現しているのみならず、当時は艦船の時代で、朝鮮戦争は飛行機の時代でしたけれど、現在は核ミサイルの時代。緊迫の度合いはかつてより一段と深いと考える見方が成り立ちます。

ですから、北朝鮮が核ミサイル保有宣言をした途端に、極東の地政学的な構図は劇的に変わる可能性があります。

## 中国と北朝鮮の関係

遠藤 北朝鮮の核保有それ自体が厄介な問題なのに、そこにロシアとか中国という関数が関わってくる。それから金正日体制がどついつ風になるのか。そういったものが複雑に絡まり合っている。

渡辺 絡まり合ってますね。皮肉を込めて言えば、北朝鮮

の自主独立志向にはきわめて強いものがあります。

中国が北朝鮮に対して強い影響力を持つていて、エネルギーも食糧も中国の援助がなければ成り立たないという構図になっているのは事実です。権力継承についてお墨付きを一番先に与えたのも中国です。

そんなわけで六者協議でも、中国の北朝鮮に対する説得に期待を掛ける向きがありますけれど、これは間違つた見方です。中国は北朝鮮に嫌悪感を超えて憎悪感を持つているのではないでしょうか。北朝鮮の崩壊カードに一番怯えているのは中国なのです。北朝鮮との戦争が起これば悲惨な戦争になつてもいずれ米韓軍が勝利します。そのアメリカに支援された韓国が国境に迫るのは中国にとっては許容し難いことでしょうね。

遠藤 自由民主主義体制の米韓が中朝国境まで迫ってくるような事態を、もちろん中国は承認しないだろうけれども、さりとて、北朝鮮をどこまで支えようとしているのか。

渡辺 崩壊すれば北朝鮮から相当の難民が発生する。向かうは延辺の朝鮮族自治州で二百数十万人の朝鮮族がいる。脱北者は皆あそこへ行って匿われてそこから逃げていくわけですけど、ここに百万人を超えるような難民が出て行った場合、阿鼻叫喚の世界になるでしょうね。

そもそも中国共産党にとつてもコリアン・チャイニーズ

は一番扱いにくい存在だと見なされているのです。ここで  
の軋轢、混乱が東トルキスタンつまり新疆ウイグル自治区、  
チベット自治区などの、少数民族の独立運動に火を点けな  
いはずはない。どんなことが起こるかは共産党でさえ測り  
難い状態にあると思うのです。

だから中国は本気で北朝鮮の非核化をやるうなんて思っ  
ていない。朝鮮半島を語る六者協議のキーワードは朝鮮半  
島の「平和と安定」と「非核化」ですけれども、中国が求  
めているのは非核化ではありません。いくら核を持つのが  
あの大国中国に金正日が核をぶち込むわけがない。中国は  
現状維持、つまりは「平和と安定」を望んでいるのだらう  
と思います。

金正日は極めて巧妙な外交的天才であつて、金正日を取  
り巻いている人たちもそうなのではないかと思ひます。い  
やらしいまでに、中国が北朝鮮をどのように考えているこ  
とを知っているのです。犬が尻尾を振り回すのではなくて  
尻尾が犬を振り回しているという構図になっているのでは  
ないでしょうか。

六者協議で「平和と安定」のために中国が一所懸命奔走  
しているというのは西側に対する「偽装」ではないでしょ  
うか。西側はあれだけの譲歩をさせられ、かつ核開発の余  
裕をもたつぷりと北朝鮮に与えてしまつてゐる。北朝鮮は

中国との関係に於ては自分の生存空間を確保するために最  
大限の努力をやっており、それが成功しているわけですよ。  
遠藤 支那と朝鮮との関係を振り返ってみると、支那は常  
に朝鮮を支配し、従属させてきたわけですから、いま、  
北朝鮮は核を手にした。これは歴史的にみると、これまで  
とはかなり異質な状況ですね。

渡辺 現在の韓国は北の非常に強い影響力の下にあると私  
は見えております。韓国はあの挑発的な北朝鮮を前にしなが  
らどうしてここまで宥和的、平和的になれるものかと思つ。  
それはやはり思想戦において北朝鮮が勝っているからです。  
武器を用いた戦いというよりは思想戦でしょう。無数の工  
作員がありとあらゆる組織の中に入ってそういうプロパガ  
ンダをやつてゐるということですね。

それから同時に、韓国側には北朝鮮に対する奇妙な劣等  
感があるのです。「日本帝国主義と戦つて勝つたのは北朝鮮  
軍だ、金日成軍だ」という神話です。確かに韓国は独立の  
ための闘争は何もしていない。だから北朝鮮の馬鹿話にま  
んまと嵌まり込んでゐる若い韓国の若者がいっぱいいます。

それから戦後の日本を蝕んできた日教組と全く同じ組織  
が韓国では二つ三つ活躍しています。軍事的には韓国優位  
に統一できたとしても、生まれた国家が対外調和的で融和  
的な国家になるといふ保証はありません。巨大な反日国家



になるかも知れない。

## 通商国家としての韓国

遠藤 ところで、ここで渡辺先生ご自身の朝鮮半島観をお伺いしたいのですが、先生は開発経済学という視点から韓国の朴政権の政治経済指導を研究してこられた。その当時から現在とでは、朝鮮半島に対する見方が変化したのではありませんか。

渡辺 大きく変化しましたね。朴正熙は韓国人ではなくて日本人ではないでしょうか、その心底は。私が見るところ、あの時代の韓国の最大の成果は、朴が朝鮮半島を通商国家として海に開かれた国にしようと考えたところなのではないでしょうか。六五年の日韓基本条約に対して国論は屈辱外交絶対反対だった。

もしも朴がポピュリズムの大統領であったならば日韓基本条約締結はまず結ばなかったと思うのです。加えて、あれだけの請求権資金、それにくっついた大量の借款を日本もよく払ったと思うのです。

当時の日本の財界人の中には韓国を併合し苦勞させたという贖罪意識もあって、稲山さん、永野さんたちの時代のことですけれども、韓国への実に厚い協力をやったのです。

あの時代の韓国は日本から資本財を導入し、それから高度の中間部品や技術を導入し、韓国の安い労働力と安い土地を使って作った最終製品をアメリカに輸出する。まさに太平洋の大国である日米とのリンケージの下で通商国家になり、その資金を以て軍事力を強化し北朝鮮に対抗しようという精神を持っていたのだと思うのです。その精神が脆くも崩れたのが金大中、盧武鉉の十年続いた左派政権の時代。左翼や反韓意識を持った身中の虫があらゆる細胞の中に巣食ってしまった。

遠藤 支那の圧力に屈し続けた朝鮮のような半島国家がどうやって自主独立の国として成長するかということが重大なポイントになるわけですが、彼らが自立を獲得するには、通商国家として脱皮するしかありません。別の言い方をすれば海洋国家。半島国家でありながら実質的に海洋国家として生きていく決断ができるかどうか。それを、かつて朴政権はやるうとした。

渡辺 朴政権には明らかにその意思があったと思います。日本の政策としても朝鮮半島は日本の鬼門ですから、この国を海の通商国家、海洋国家にするのか、あるいは大陸国家に押しやってしまうのが日本のアジア外交の中でも極めて重要なポイントだと思います。

遠藤 古くて新しい問題ですね。韓国自身にとっても、ど

こちらを選択するのかという問題が常に突き付けられてきた……。

渡辺 文字通り韓国に突き付けられているテーマですね。ただと目下の韓国はフラフラなのではないでしょうか。外交方針がうまく立てられずにいる。

遠藤 国内では親北の左翼が一定の勢力を維持する一方で、通商国家として当面成功を見ているというところが、一つの厄介なところなのではないでしょうか。

渡辺 そうですね。すぐ北には中国、ロシア、南を見ると日本列島が覆いのように被さっていて、あそこは地政学的に軍事力で覇権を握れる国ではない。通商国家として生きるより他にまともな選択肢はない。海洋国家としての朴時代の韓国が一番活力もあり成長率も高く韓国人の自信も強かった時期だと思います。

それを捨てて今、北に宥和政策を取り中国にすり寄っていくのであれば、韓国の将来は危ない。そうなると日本も危ない。

今度の延坪島への砲撃があつて特に日米韓の安保協力という言葉が初めてリアリティーを持って出はじめたのは吉報ですがね。何かしら新しい動きが出はじめたのかな。尖閣問題があり、延坪島があり、その前に天安の激突事件があり、これを新しい協力の出発点とし得るかどうか。

この間アメリカで中間選挙がありました。それまでのオバマと中間選挙後のオバマでは明らかに対アジア政策は変化しましたよね。

ご承知のように中国は南シナ海を「核心的利益」とよんだ。これまで中国が核心的利益という場合はチベットとか新疆ウイグルとか台湾とかそういう地域だけだったので、けれども、今度は南シナ海に核心的利益を言った。同時に尖閣での衝突があった。いずれ東シナ海も核心的利益の対象地域だと言つ可能性は大だと思つのです。

つまり中国が言つところの第一列島線の海洋覇権は自分が握ろうということ。これは日本のシーレーンでもあります。海南島に原子力潜水艦の基地がありますから、南シナ海を潜水艦が潜没してそこからトマホーク型のミサイルでも撃つ準備をされたら、これは捕捉できないのです。地上配備型のものであればピンポイント攻撃ができるけど潜水艦の場合にはできない。そこでクリントンには激昂して中国に対応したわけです。ベトナムをはじめとしてアジアの国々は、中国の手前、手は叩きませんでした。が、「さすがアメリカ！」という思いは持っただろうと思います。遠藤 ところが、日本政府はオバマ政権のアジア政策変更に対応しているかというところ、トラックを二周り、三周り遅れて走っているところか、逆走しています。



## 日米同盟は東アジアの公共財

渡辺 まったくねえ。ベトナム、ラオス、カンボジア、マレーシアの東半分、ブルネイ、この辺りは地図でみると南シナ海以外に外洋に出て行く海がありません。中国の領海法はこの周辺地域の海岸線に沿って領海を設定しています。領海法は中国の国内法ですから他の国が拘束される必要はないのですけれども、そうはいつてもなかなか中国に楯突くことはできない。政治学用語でいうところのフィンランダイゼーション（フィンランド化）、つまり相手に敵わない時には相手の意に沿うような行動をする、そういう動きが既に東南アジアの中で始めている。

そのことには日本も大きな責任があります。日米同盟が東アジアの海洋秩序という地域秩序を作るための公共財であるという認識が日本人には欠けています。日本に緊迫の事態が発生した時、米軍が来て日本を防衛してくれるとしか考えないのは明らかに日本人の知的な墮落です。

一昨年鳩山政権が誕生した時に台湾へ行って、東アジア情勢を台独派の集会で話したのですけども、驚かされたのは台湾の人々の方が日本人よりも遥かに日米同盟の危機を心配していたことです。

やはり日米同盟は公共財です。インドネシア、シンガポール、ベトナムといった国は、核心的利益と言った中国に対してアメリカのオバマ政権が反発してくれたことを非常に心強く思っているわけです。ここで日本が集団的自衛権の行使容認という拳に出れば、アジアの海洋秩序を守る、そして中国を押し戻すことができるかと私は考えます。このチャンスが逸すると次は何時チャンスがやってくるかわからない。あるいはもう来ないかも知れないという危機意識さえ持っています。

遠藤 チャンスなのですが、日本の国内の政治情勢はそのチャンスを生かす情勢にはない。日清戦争後に朝鮮は「日本恃むに足らず」と支那からロシアの方に顔を向けはじめた。同じように今、東南アジア、ASEAN諸国がここ数年の日本のあり様を見ていて「日本恃むに足らず」と思っているわけです。最近では、シンガポールの新聞から「くじけるな、日本」と励まされていますね。みんな、日本は元気がなくなっていると思いは始めているのです。

確かに日米安保体制には公共財としての意味合いがあるのですが、その公共財としての意味合いを、日本自身よりも周辺諸国の方が深く直観的に理解している。その公共財を当事者である日本が足蹴にして退行させている、価値を徒に貶めているという状況です。

その公共財たる安全保障装置というものの価値はいくら強調しても強調し過ぎることはないのですけれども、少なくともこれまでの日米同盟の背景には常に共産主義の脅威に対抗するという大義名分があったわけです。日本の、特に近現代史の一つのドラマを織り成す何本かある軸の一つは共産主義の脅威にどうやって対抗するかという問題だったのだろっと思っわけです。この点は過小評価してはならない。

特に日露戦争直後にロシアでは革命が起こってその後第一次大戦とかあるいはシベリア出兵があった。そしてシベリア出兵は日本の立場からすれば共産主義の脅威をアメリカやその他の欧米列強と共にどう防ぐかということ、今風の言い方をすればPKOに参加するようなものだったわけですが、それを機に、今度はアメリカの日本に対する警戒心が高まる。

つまり、太平洋を挟んで西太平洋を見るアメリカの危機感と、日本海を挟んで大陸国家の、ある時には共産主義という衣を纏った大きな勢力の脅威に直面する日本との、その脅威に対する認識は自ずと深さが違っているのです。むしろ当事者は日本であって、日本の方が深刻な当事者意識を持たなければならぬ。にもかかわらず日本は当事者というよりもお客さんというか天井桟敷の観客のような態度

を、この六十六年間とり続けてきている。

渡辺 日本はこの六十数年間、妙な表現ですが、平和に過ぎましたよね。日本の兵隊が一人の外国の兵隊も殺してない。日本の兵隊も外国の兵隊によって殺されることもない時代が六十数年も続いたなどというのは、詳しく調べたわけではありませんけれども、世界史に類を見ないことなのではないかとさえ思います。平和が六十数年も続けば「平和が常態であって戦争が異常だ」と考えてしまうのではないのでしょうか。

私は戦争が常態で平和は異例だと考えます。平和というのはスーパーパーがいて、世界全体をその秩序によって染め上げている時代です。あるいは米ソ冷戦時代のように盟主同士ががっぷり回しを取って土俵の真ん中で組み合っているような勢力均衡の時代です。こういう一極支配、もしくは二極均衡というシステムの中にいる時にしか平和は得られない。日露戦争以後の日本は日英同盟の下で他の国々との勢力均衡の下で平和に生きられた。大正デモクラシーはまさにその産物です。

でも日英同盟下の平和はその後ですぐ崩れてしまいました。第一次世界大戦の眞の勝利者は日本とアメリカでした。日米覇権争奪戦は不可避であり、結局は日本がアメリカに挑んでたたきのめされるという運命をたどったのです。開

国維新から現在迄の百何十年かの歴史を見るだけでも平和というのは常態ではないですよ。ただ戦後それを常態と思わせるだけ平和が長く続いてしまった。先ほどの表現を繰り返せば、やはり日本の平和は長く続き過ぎたのですよ。

遠藤 覇権国家の存在という要因と、それから勢力均衡という要因が、冷戦期には両方重なっていた。その冷戦構造というのは、誤解を恐れずに言つならば、日本にとっては天佑のようなもので、冷戦ゆえに日米安保体制が日本に都合良く機能した。だから我々は、安心して、真面目にいいものを作つて売つて歩けばそれが売れた。昨日より今日、今日より明日必ず豊かになるという時代だったのですが、その構造が、少なくともヨーロッパでは二十数年前に終わつてしまった。他方東アジアでは醜悪にもそれが残つています。

渡辺 ベルリンの壁が崩れて東西冷戦が終焉したのはヨーロッパの話であつて、東アジアではありません。むしろ冷戦構造が崩壊したがためにあちらこちらの地域が、安んじて暴力を噴出させるような条件ができたと思つた方が正しい。フランスの政治学者ドミニク・モイジの『感情』の地政学』が早川書房から出ています。『情念』の地政学』と訳した方がずっと面白いかな。フランス・フクヤマのように弁証法的な発展の歴史は終わつて、冷戦崩壊以降は争い

事もなく単調で退屈な時代がずっと続く、もう歴史はなくなつたのだという見方はヨーロッパを対象にした見方であつて、アジアはそうでないということをフクヤマは主張していなかった。今度のドミニク・モイジの著作を読んで、つくづくそうだなと思われました。

ユーゴスラビアに典型的に現れているように、冷戦の崩壊によつて、元々自分の体内にあつた黒々とした情念を一気に放出できる空間が生まれたという事ではないでしょうか。人々は、人種集団、言語集団、宗教集団、あるいはカルト集団を含めて、人間の原初的集団へと分化していく。その分化プロセスで発生する摩擦熱、軋轢が中央アジアやEUの外延地域で起こっている凄惨な地域紛争の実態だろつと思つたのです。

現代は勢力均衡が崩れた時代のいわば混乱期です。これからどういつ時代が来るか判断は容易ではありませんけれども、新しい覇権国家体系が生まれる前段階だろつという気がします。少なくとも私には理想主義的に将来を見ることは全くできないですね。

### 世界で最も深刻に共産主義の脅威と対峙した日本

遠藤 そのときに情念を前面に押し出しながら原初的な統



合を維持しつつ抬頭してきている国が中国だろうと思うのです。力を背景にして(そのバックボーンは中華思想という情念にほかなりません)、自己の利益、核心的利益をどんどん拡大していくというやり方をしている。ところが、中国の擡頭に対して、これまで超大国としての地位をほしのままにし、時には多少のワガママも通してきたアメリカが当惑して、どう対応すればいいのか、大きすぎる問題をいささかもてあましている観があります。この端境期に、先程おっしゃったオバマ政権のアジア政策の変更があるのだろうと思うのですけれども……。

フランス・フクヤマの話で思い出したのですが、冷戦崩壊寸前の東側の国々を歩き回ったフランス人ジャーナリストのギ・ソルマンという人がいるのですが、この人はフクヤマとは見解が違っていて、巨大なリヴァイアサン国家が生き残るだろうと、冷戦崩壊の直前に予言しています。そういった新たな怪物国家を相手に、かつてソ連相手に冷戦を戦ってきたアメリカは、同じやり方が通じないと思っている。おそらく中国を封じ込める意思も力も現在のアメリカにはないでしょう。

しかし、中国の野放図な支配権拡大を拱手傍観したままとも思われぬ。そのアメリカの傘の下で、これまで安穩に生き延びてきた日本人は、当惑どころではなく、周章狼

狽している。

この百十数年間の日本の近代史のテーマは、共産主義という衣を被った専制体制の脅威とどう対決するか、でした。そこにアメリカという関数が、かつては敵として、その後は同盟国として介在してきた。

日本は、日露戦争後に広大な満洲の権益を持ったことで、海洋国家というよりも大陸国家としての立ち居振る舞いを求められるようになるわけです。これが歴史の皮肉で、つまり日本人がそれまで経験したことなかった重荷を背負い込んでしまった。

その満洲経営の過程で色々な悲劇が生まれてくるわけですが、そこには共産主義との対決という大問題があったわけですね。世界で最も深刻な形で共産主義の脅威と対峙していたのは日本だったのです。尼港事件、日本人がパルチザンに虐殺されるという出来事もありました。これに対して日本国内では世論が沸騰するわけですが、考えてみると最も早く直に共産主義勢力の暴力の被害に遭ったのは日本だった。日本人はこのとき共産勢力の暴虐性を体感したのです。

渡辺 坂本多加雄さんがよく言っていたのですけども、共産主義陣営と自由主義陣営が戦ったのは、今言った満洲を舞台にただけではなくて、それよりも前にまず日本の国

内の思想戦にあったのでしょね。

共産党対特高という形で左右対立の様相を呈したのは、世界の中でまず日本でした。レーニン流のマルクス主義はソビエト連邦を経て一番早く日本に伝わってきた。それが大変な悪魔であるということをも最も早く気付いたのも日本でした。

遠藤 こういう言い方をすると情緒的かも知れないけれども、日本は、最も健気に戦っていたと思います。頭の中で戦うのではなくて身体を張って戦っていた。おそらく日米同盟という公共財の核心的なところにあるのはそういう身体記憶なのだろうと思うのです。

ところがアメリカは、日本人が身体的に共産主義の脅威と戦ってきているということを理解できない。日本人自身もそれを忘れようとしています。現政権下で日米同盟がボロボロになってしまいつつある根底にはその認識のギャップ、あるいは変化があるような気がします。だって、左翼ないし親左翼に支配された政権なのですから。

## ポスト・モダニズムという気分

渡辺 日本は米ソ冷戦体制下の自由主義陣営の中で、自由主義的な国家として繁栄し民主主義も定着したのですけれど

ども、冷戦が終わった後に、どのような世界が来るかを想定して日米同盟を再定義するかという問題意識をまるで持てなかった。

私はポスト・モダニズムという言葉をもっとよく使つようになっていきます。民主党や自民党の人達をはじめ、ある世代の人たちは同じ気分の中で漂っているように見えるのですけれども、その気分がポスト・モダニズムです。

国家と言いたくないから市民社会と言いつつ、国民と言いたくないから市民と言いつつ、さらには地球市民、東アジア市民と言つたりする。国家に価値を見出さず自由な個として生きることが善きことだという気分です。国境概念や国家観念はできるだけ希薄化させようとポスト・モダニストは考えます。国民国家が紡いできた歴史、つまり時間、領土、領海、領空という空間など、時間的空間的な境界概念を摩滅して他の国々の個と平等に交わりたい、そういう気分です。思想なら観念体系ですから論理的に話ができますけど、何しろ気分というものは身中に忍び込んで容易にこれを拭うことができない。そういう気分を色濃く持った集団が民主党という政権なのでしょうね。

言つまでもなく日本はこれだけ成熟した国家であり、民主主義も定着し価値観も多様化し、その意味で日本はポスト・モダニズムの国だと言つておかしくはない。だけれど

も日本を取り巻いている国々はナショナリズムをキーワードとするモダニズムそのもので、国家形成の真つ最中にある。そういう国は必ず敵を求めます。それが反日ナショナリズムです。中国共産党が何故あれほど反日的なのか。それは中国共産党の支配の正統性の根拠が抗日戦勝利にあるからです。この旗を下ろすことはできないのです。韓国ももちろん同じです。韓国併合では儒学的秩序の優等生である韓国が野蛮な日本に支配された。こんなことは絶対許せないという気分がある。そしてロシアはプーチン、メドベージェフの双頭体制の下で南下政策を始めている。

そういうモダンの海の中でポスト・モダンの日本が涼しい顔で一人で船を漕いでいる。鳩山さんは東アジア共同体構想を出した人です。

しかし彼はこの構想を理解できずにあります。ただ何かこうなっただけという気分があるだけです。構想が実現できればそれに越したことはないが、夢のような話です。その意味では幼児の発想です。マルクス主義という明確な思想ではなく、ポスト・モダニズムという厄介な気分が日本を覆っていて、この気分を払拭するのに日本は随分長い時間を掛けなければならぬという感じがします。

遠藤 十数年前ですが、菅直人さんが第二次民主党現在は第二次代表だった頃に直接話を聞いた時、「自分は国家とい

うものはアプリアリにあるものではない」という言い方をしたので。所属するも自由しないも自由、会社に所属するのもしないのも自由、労働組合に所属するのもしないのも自由、あるいはお医者さんになるのもしないのも自由、であるのと同じように日本国民であるのもしないのも自由、というのが彼の思想、というより気分です。その気分を集約したのが「市民」という言葉なのでしょう。「何故『国民』と言わないのですか？」という私の質問に対して、菅さんは、そう答えた。

渡辺 日本人として生まれたのは運命です。自分では選択しようもない宿命です。民族はそういう意味では、宿命の歴史の連続です。この間平川祐弘さんと話をしている、日本国憲法第一条「天皇は日本国の象徴である」というのは「半分は真実だけでも」と強調しなければならぬことがある。天皇とは歴史の連続の象徴であると捉えるべきだ」と言われた。私が長く言いたかったことを初めて言語化してもらったという思いがしました。

遠藤 おそらく日本人は、あるいは日本民族は歴史を背負うことによって、頭の中で小賢しく考えるのではなくて、実践的に、体験的に、最小不幸社会を作ってきた民族だろと思うのです。つまり他国に逃げ出す必要性を感じない、大きな意味ではそういう歴史の連続性を担保としてきた国



家であり民族であった。その最小不幸社会とは頭の中で思いついたものではなくて、まさに歴史を背負う連続性の上に成立してきたのだらうと思う。ところが最近、そういったものは小賢しく机の上で構想、計画するものだという勘違いがまかり通っている。これは考えてみれば、歴史に対する実に傲慢な姿勢と言わなければなりません。渡辺 勘違いなのでしょうね。おっしゃるように、最小不幸社会というのであれば日本の歴史を発掘すればいいだけの話です。

菅さんは『大臣』という本を書いています。政権を取った後に増補版が出たのですが、それに「国の形」という章が加わった。へえ、この人でも「国の形」などという言葉を使うのかと思って読んでみたのですが、実は増補版にもこのことは何も書いてありません。官僚内閣制から政治内閣制に変えようという従来の主張がなんだかぼんやりとした文章で書いてあるだけです。

私は菅という人を特殊な人だと思っではいません。あるグループをシンボライズしている人だと思っただけです。菅というのはチューブですよ。市民運動というのは大学の愛好会みたいなもので気分を同じくする人が一緒に入り、そして嫌な人は出て行く。選択できるわけですよ。市川房枝さんを担いで、いつの間にか偶然で首相になってしまった

人ですけども、彼の生涯は市民運動という狭いチューブの中を広い視野や深い思想をもつこともなくうごめいているうちにトップになってしまった人だと思っただけです。愛好会的な人物です。国家論がないうえ、国家は選択できるとも言いたいようなとんでもないことを考えている人間です。だけどそのように考えている知識人は日本の中では少ないのでしょうかね。

遠藤 個人としての心地良さ、気分の心地良さと、国家を背負う覚悟を混同しているのでしょうかね。個人としての気分の延長線上で国家を何となく感じるだけ、それが菅総理の気分のような気がします。

渡辺 日本の開国維新から日清日露戦争までの日本の指導者の思想と行動を見ると、国家という観念を研ぎ澄まさないければ自国が生存できないという究極の状況にあったが故でしょうか、常に国家を意識し、この国家を守るために対外環境を伶俐に観察し、その観察の上に立っていかに迅速に行動することが日本の国益にとってベストか、そのことだけを考え、生きた人間なのであるかと想われます。そのように考えない指導者は権力闘争の過程で落っこちていったに違いない。だから私たちが名前を知っている人物は、そういう過程で選ばれた俊秀なのだと思います。

現代はどうかとなると、前にも遠藤さんと話したように、

日本は中途半端に大きい国になってしまったのです。アメリカのように巨大な国であれば何かあると逃げ込む国があるわけです。だけど日本はどこにも逃げ込む場所がない。そういう意味では実は日本はそれほど大きくはない。だけれども、他方では、経済力だけは世界で二位三位という巨大な国です。小国であれば小国なりに、大国であれば大国なりの行動原理が自ずと出てくると思うのですが、日本はどうも中途半端なところにあつて、いい加減な思想でも何とか食っていける。対外的にもそんな乱暴なことはされまいという風な、六十年続いた考え方がどうも払拭し切れな

い。

北朝鮮問題、尖閣問題、北方領土問題、南シナ海、次いで台湾、東シナ海と様々な問題があるのですが、どうも危機意識は薄い。ここしばらく中国、北朝鮮、ロシアの蠕動が続いていくに違いありませんから、これが日本の国論、日本人の気分を変えていく転換点になってほしいと思うのです。

遠藤 現在はその転換点になるかどうかを試されているのではないかという気がします。どうもありがとうござい